
勝手に飛んで異世界デイズ

東雲八波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝手に飛んで異世界デイズ

【Nコード】

N0396Z

【作者名】

東雲八波

【あらすじ】

気づいたらそこは異世界だった。なんでそんな簡単に言えるかと言ったら、頭の上をドラゴンが通過しているからです、何か異論はございますでしょうか！

俺こと椎橋佑は、いつの間にやら高校の先輩である宵原良人（男である。ロマンスも何もない）と異世界にいた。とりあえず人を探すために歩いていたら、なんと、凄い可愛い女の子に出くわしたのである。

「あ」

と、言ったときにはもう遅い。風によってスカートはめくれ上がり、パンツが見えて、その後はなんか魔法でボロボロになってしま
う。

なんだか散々なことになりそうだ　と、これは本当に始まりの
始まりに過ぎなくて、俺を待ち受けていたのは散々すぎて塵芥にな
りそうな痛々しい現実であった。

笑いと涙と戦闘と！　最強存在（俺じゃないけど）と美少年美少
女と化け物がわんさか出てくる若干えっちい（俺は紳士である！）
ファンタジー！

プロローグ

「おいおい、まさか小説家になろうに掲載されている小説じゃあるまいし……」

異世界。そういう単語は知っている。どちらかというと、パラルワールドという意味合いよりかは次元的な意味合いで、俺が生きてきた地球　ひいては宇宙とか、そこらへんとは何ら関係なく存在する、別世界のことを指すことくらい、高校一年生の俺なら知っている。

もちろん、知っているからといって、素直に異世界の存在を認めるかって訊かれたら、そりゃ、地球に在住の方々なら口を揃えて認めないというだろう。頭が現実よりも夢のほうにいつてしまいがちな、アレな思想の方々や、科学的に考えて異世界は存在すると妄言を主張し妄信する偉大なる先生方ならともかく。

あ、既にわかるかもしれないが、もう俺はそちら側の人間じゃないらしい。いや、なぜって　俺も現在必死に辻褄あわせを考えているところなんだが、これがもう、八十年代九十年代のアニメや漫画にありがちなくらい、異世界っぷりのあるところに　俺が今、いるからである。

再ブームが来てるらしいよな、異世界。市販されている文庫の小説だろうがネット小説だろうが、異世界にとんでいつてドンパチやるって、ありふれているような気がしてならないもんな。

ところで神さま、そんな現状に一石を投じるがごとく、俺をその異世界に放り込んだのはなぜなんでしょうか。

現在、俺の真上にはどこまでも続いているように感じられる、それはそれは清々しい青空が広がっていた。

いやまあ、それくらいだったらいいんだ。ちょうど地面は気持ちの良さそうな芝生だし、太陽もぽかぽかしていて気持ちがいい。そよ風がどこからか吹いていて、小鳥のさえずりも聞こえるのだからもう横になって寝てしまいたいくらいだ。

もしかしたら、寝れば夢は覚めるかもしれないしな。

小鳥のさえずりが聞こえる。

うん、小鳥が飛んでいるのはいいんだ。平和的だしな。

結構田舎っぽい雰囲気があるけれど、他にヘリコプターや飛行機ぐらいだったら、飛んでいてもまあ許そうじゃないか。

しかし、伝記にでも出てきそうな、ドラゴンめいたものが飛んでいるのはどういうことぞ？

というわけで、ときどき、本当ときどきだが真上をドラゴンが通過する。

ときどきつてことはつまり、ときどきであることを実感できるぐらいの長い時間、俺たちは呆気に取られていた。

「……これはなんかもう、笑うしかないよねえ。さすがの僕も、こんな面白おかしく頭のおかしそうな世界に放り込まれたら、思わず踊り狂っちゃいそうだよ」

「……………一人で踊ってるよ」

それでドラゴンがアンタに目をつけても俺は知らないからな。

俺の隣には、俺と同じくこの異世界に飛ばされた青年（俺が高校二年生で、この人 よいはらよいひと 宵原良人が高校三年生だ。年が一つ上ということである）がいた。

凄いというか、いつも以上にいい笑顔を浮かべていた。

カメラを向けられて「笑って」と言われても言われなくても、普段から似たような笑顔を顔面に張り付けて生きているような男。

それが宵原良人という人物である。

高校生にしては長めの黒髪が、吹く風に合わせてなびく。そのた
びに太くもなく細くもない眉が現れ、半眼の瞳も見え隠れする。低
くもなく高くもない鼻の下には、皮肉そうに歪められた　しかし
美しく歪められた唇があった。

整った顔面をしていらつしやる宵原は、俗に言うイケメンである。
背も高く、一八〇センチメートルくらいはあるんじゃないだろう
か。体型もきゅっと締まったいて、決して筋肉質ではないものの、
骨と皮でできているようなひ弱な印象もない。

その宵原だが、服装が学ランだった。俺と同じ学校の人物だから、
そりゃ、予想の範囲外ではないのだが　しかし、ドラゴンが飛び
交うこの空間では、あまりに不釣り合いな服装である。

対して俺は、私服。パーカーとジーパンという、自分でもあまり
イケてないと感じる、二流のファッションスタイルであった。

ところで、俺がここで意識を確立したのは、確か午後八時ごろに
意識を失って、初めてじゃないだろうか。

すると、この人はおそらく、午後八時まで制服で過ごしていたの
だろう。学ランの神様は大喜びするんじゃないだろうか。感無量、と
か言って。

話を戻そう。

この世界、ドラゴンが上空を旋回しちやったりしているところ以
外は、今のところ普通の　俺たちの住んでいる地球とはほとんど
何も変わらなかった。ほとんどというのは　車がないのだろうか、
空気が綺麗でおいしいとか、そういう当たり障りのない程度のこと
しか、変化が感じられないのである。

……いやいや。

ドラゴンって。

ゲームとかで得られる知識と言えば、炎を吐くとか、空を飛べる

とか、異常にでかいとか、人を食うだとか　それこそファンタスティックなものばかりである。現実になさそうな、そんな特徴ばかりがドラゴンの特徴で　つまり。

現実に見えると、ドラゴンさん、マジばねえ。

首が痛くなるほどに見上げないと見えないくらい、高く飛んでいるのに　とても大きく見える。しかもなんか炎吹いてる。翼でバツバツサッサやってる。

「なあ、宵原。あれ、どう見るよ　って！　なんでノリノリで踊ってんだよアンタ！」

「いや、ほら、キミが一人で踊れって言ったんじゃない」

「言っただけどなあ！　踊るなよ！」

たぶん頭の中で曲に合わせて踊っているのだろう　いくつかの法則とある程度のリズムで、宵原は気持ち良さそうに踊っていた。マイクを持たせたら歌いだすんじゃないかと思えるくらいに。

今さらながら、踊る発言が冗談でなかったことに気づき、とりあえずやめさせる。

「もうちょつと緊張感を持たねえもんなのかよ、普通」

「普通、こんな世界にぶち込まれたら緊張感も何も持てないと僕は思うんだけど　キミはちょつと、落ち着きすぎなくらいだ。もっとシャウトしてもいいんだよ」

「見つかるわ！」

まあ、今でもドラゴンに見つかっていないとは限らないけど……。俺は空を指差した。指差した方向にドラゴンはいないが、事足りるだろう。

「あんなもんが飛んでるくらいだ。とりあえず、タイムマシンを探

すべきだとは思わないのか」

「前言撤回。もう少し落ち着こうね、椎橋ちゃん」

そもそも時間の問題じゃないと思う　と、宵原は言う。

椎橋ちゃん、と宵原は俺のことを呼んだが、俺の名前は椎橋佑^{ゆう}で立派な男である。問題があるのは宵原の人の呼び方のほうで、男女構わず苗字の後ろに『ちゃん』をつけるのだ。……俺の名前や容姿からして女に間違われやすいのだから、勘弁してほしい。

「最初に言っただけ、まるで小説家になろうに掲載されている小説みたいな世界なんだよ。知ってる？　小説家になろうっていう小説投稿サイト」

「知らん」

「そう。まあいいや」

「いいのかよ！」

「とにかく、僕はこれに似たような世界を知っている。こういう世界には大抵、奇妙な生物がいる代わりに魔法使いとかがどっさりいるわけさ。そうしないと、物語は成り立たないだろう」

「ずいぶんとメタな発言だな」

「僕は物語の世界にいるわけじゃないからともかく、人間がいなということもないかもしれない。ここでドラゴンの餌になろうとするのは気が早いぜ」

「むしろ率先して餌になろうとしたのはアンタじゃないだろうか」

というわけで、行動開始。

一応手持ちの道具の中で、携帯電話はまったく使い物になりそうにないことがわかった。時間も明らかにずれてるわ、電話を掛けても圏外だわで、ツール機能などしか役に立ちそうにない。なので、電源を切っておいた。何しろ、充電できないのだ。いざ明かりが必要になったときに、まったく使えなくては困る。

「まるでサバイバルゲームみたいだね」

黙ってる。

宵原の携帯から俺の携帯にメールを送る試みもしたが、当然ネットワークがない以上こちらの携帯に届くことはなし。本格的にこの世界は異世界らしいな。

とりあえず、宵原の言うとおりに、まずは人を探すことにする。辺りを見渡して、草原と山が周りにあることを確認して、町や村がないことはわかった。

ここからは、力尽きるまで時間との勝負である。

「とりあえず、歩くか」

「賢明な判断だね。乗り物も道具も食料も何もないこの状況で、誰かが来るのを待つなんて選択肢はまずない。ドラゴンが上を飛んでいるわけだし。問題は――」

問題は、この何もない原っぱの上で俺たち二人が動いていると、見つかる可能性があることだ。

見つければ、知能がないであろうドラゴンにばくつといかれるのは間違いない。

ただ、だからと言って、何もしなければ餓死して土の肥料となるか、やはり見つけられてばくつといかれるかのどっちかだ。どちらにしろ　どうしたって死ぬのである。

唯一の希望は、だから人を探すことだ。ドラゴンがいるんだから、魔法云々はともかくとして、人がいればドラゴンから逃れる方法があるはず。そうすれば、一時的に助かるはずだ。

歩く。

とにかく歩く。

一時間も二時間も、

何も会話せずに、何も考えずに歩いていた。最初、俺たちのいた地点で山が近くに見えなかった方角（見えることは見えるのだが、それは地平線の向こうにあるように見えていた）に向かってずんずん進む。

いつの間にか、ドラゴンたちは遠い向こうにいた。

どうやら、あそこ一帯はテリトリーらしい。俺はときどきと述べたが　なんだ、遠くで見れば、出発地点の上空にしかドラゴンがない。

しかしどうして　俺は、こんな状況にあるのだろうか。

夢？

そうかもしれないが、だからなんだという話。夢なら夢で、とつとと解決に向かいたい。

まあ、土を踏んだり、風が触れる感覚がリアルすぎるから、夢とすることはないんだろうけど。

ならばなおさら、俺はドラゴンがいるような世界にいるのだろう。意識を失ったことは覚えている。

それ以外のことは覚えていない。

いや、最後に時計を見たとき、針は八時を差していた。なぜだろうか、それは覚えているのに、気を失う前に何があったのか、気を失った後に何があったのかがまったくわからない。

「椎橋ちゃん。僕たちはどうしてここにいいのか、わかるかい？」

俺が考えていると、ピンポイントに宵塚が訊いてきた。

わからない。

そう答える。

「そうだろうね。僕もわからない。何がどうして、僕らはここにいるんだろうね。……実を言うと、気を失う前の行動もわからなかったりする。覚えてないわけじゃなくて　わからない。忘れたわけでもなくて、わからないんだよ」

「それがどうしたんだよ。だからなんなんだ」

俺は宵原のほうを見ずに　耳だけを、後ろを歩く宵原に向けて少々足早に歩く。

「いやね、もしかしたら、記憶を消されてるのかもしれないよ、僕たちは。たぶん、僕とキミは同じ場所にいなかっただろうからまったく推測だけど、何者かが僕たちの前へ、当然別々に、現れたんじゃないかな。気絶させて、こちら側に僕らを送って、記憶を消した」

面白い推測だが、本当に推測だな。この世界よりも夢物語じゃないか。えか。

「そうだね。だけど、夢物語こそ今は有力だ。早計かもしれないが、僕たちの目的は、人を見つけることじゃないよ」

元の世界に帰ることだ　宵原は妙に落ち着いた声でそう言った。その推測が当たりなら、その人物を見つけることだが　。

俺は体を宵原に向けて、後ろ歩きで前をいく。

「やっぱり早計だな。いないかもしれない奴を探すのは無理だ」
「ま、そうだね。　ところで椎橋ちゃん、前を見て歩こうぜ」

あ？

振り向いた。

別に、前に穴が開いているわけでもない。

宵塚に向き直る。

「なんで？」

「人は常に前を向いて歩くべきだからさ　という教訓めいたことはまったく関係なくてね。もっと前をよく見てごらん。キミがさっき見たのは足元だよ」

言われて再度振り向く。

前をよくよく見る。

それはもう、眼球が飛び出しそうなくらいに力を入れて、前を見ると　道があった。

道上に、人がいる。

人がいる！

思わず全力で駆け出した！

時間にしておそらく二時間半くらい、その間で充分人がいない絶望を考えていたのだから、この感動はとんでもない！　数値で表したらスカウターなんぞはじけ飛ぶだろう！

後ろで「元気がいいなあ、椎橋ちゃんは」と呆れ声を出す宵原のことなど気にもしない！

俺の足は結構速い。五〇メートル走は六秒台だ。運動部じゃない人間の中ではトップクラスだろう。

そんな俺だ。もう光の速さで走っているようにすら感じた。自ら風を切っていた。もれた自分の言葉さえ、既に俺の後ろにあるように感じられた。

その人は女の子だった。見た目俺と同年代の、若々しい少女だった。それこそまるで創作物のような　繊細かつ優しい顔の作り。

花とか、人類の単語を連ねただけでは言い表せないような、そんな可愛さがあった。

体つきも年相応のもので（もっとも本当に俺と同年代かどうかはわからない）、グラマラスとは言えないまでも、そこそこに発達した胸部や腰つきはやはり女性を感じさせる。体の線が丸くて、色気と幼気が混ざっている雰囲気からか、こう、柔らかくて温かそうなイメージがある。

服装は　なんというか、奇抜なもので、いかにも魔女がかぶつてそうな黒いとんがり帽子を頭に乗せて、妙に凝ったつくりの（緑色の紋章がいくつか印刷されている）黒いワンピースを着ていた。靴はタイツめいた黒いブーツだ。

むき出しになった腕の先には黒い手袋をしている両手があった。右手には辞書みたいに分厚い本が、左手には彼女の等身大ほどの箒が持たれている。

とても魔女っぽい。

とにかく俺は興奮冷めやらぬままにスピードを落として、彼女の目の前に立った。

彼女の目は開かれた分厚い本に落とされていて、彼女はどうか俺に気づいていないらしい。

どうしたものか。

普通に声をかければよい気もするが、彼女から見たら俺は明らかに異端者だろう（パーカーとジーパンである。恐ろしく雰囲気ぶち壊しだ）。

いやまあ、それでも正面から行くんだけど

「あ」

間抜けな声を出したのは俺である。

いや、ご容赦願いたい。俺の想像を上回る、とんでもないことが起きたのだ。声を出さなければ目の前の彼女にバレなかったものを、しかし本当に間抜けな俺は声を出してしまったのだ。なんと責められようが、これはどうも避けられなかったのだから、許してほしい。

当然、間抜けな声を出すのにも理由がある。
パンツが見えたのだ。

……………簡潔ならばいいとか、正直なら許されるとか、そういう問題ではないのは重々承知の上で、俺はもう一度言う。
パンツが、見えました。

一陣の風　俺が走っていたときに巻き起こった風よりもはるかに大きい、鋭い風が思い切り吹いた。俺の真後ろから　彼女の正面から、思い切り吹いたのである。

彼女の服装はワンピース。

風によって大きく巻き上げられたスカート部分は、彼女の身に着けているものの中でもっとも明るい色をしているのではないかと思えるものを、大胆にさらけ出すようにめくれ上がった。

いや確かに、さっきまで風は吹いていた。しかしまあ、きっと彼女は人がいないと思って油断していたのだろう。事実、道中に人はいなかった。

右手には本を持ち、左手には箒を持っていて、しかも彼女は意識を本に向けていたのである。

普段なら風が吹いたところでしつかりと抑えたのだろうが、その風が吹くことさえ、気にしていなかったのだろう。スカート部分がめくれ上がったところで、どうせ誰も見ていないのだろうから。

見てしまった。

明るい　まぶしささえ感じる、真っ白を。

清楚な下着だった。

正直に言うと、そこまで性的な興奮を覚えるような、そういう下着ではない。むしろ、守護の雰囲気纏いに纏った、厳かさを感じられるような、そういう下着だ。

黒い服を着ている彼女が穿いている　これがまた、白と黒の調和を生み出していた。一つの調べが生まれそうなほど、視覚的にそれが確認できそうなほど、スカートの布地と下着の布地は、見事に噛み合っていた。

目を離したくても、ひきつけられてしまう。彼女はそういう魔法でも使ったのだろうか　そう思えるほど、俺の意識はそちらに引っ張られていく。

風はそう長々と吹かなかった。突風にしては　やはり二、三秒ほどだから長くはなかったが、しかし、俺にとっては地球が生まれから滅ぶまでの長い間、パンツを見ていることに終始していたようにさえ感じられた。

その間、彼女は呆気に取られている。

視界の端に見える、呆然とした顔。ここに人がいたことに驚いているのか、それとも俺が彼女の下着を凝視していることに驚いているのか、俺には想像もつかない。

しかし、彼女のそんな表情を認識してさえ、俺は下着のほうにばかり目がいつていた。彼女自身の美しさや可愛さも、おそらく言語化できないだろうが　この下着を合わせると、もう拝むべき対象なのではないか、彼女はすでに神の域にまで達しているのではないか、そう思ってしまう。

「……………あ」

スカート部分が元の位置に戻り、数秒が経った。ようやくパンツから目を離すことができた俺は、当然彼女の顔を見る。

啞然としたまま。

真っ赤になった。

体をわなわなと震わせて、しかし怒りや羞恥を飲み込むように深呼吸すると、俺のほうにずんずんと迫ってくる。その表情は鬼気迫るものがあつた。あまりの迫力は、後ろに虎やら竜やらを従えまくり、百鬼夜行みたいな情景が目に見えはるものだった。凄惨。

顔が目の前にある。きっと彼女の目から見ても、俺の顔が目の前にあるのだらう。体は密着しそうな距離　まさしく零距离である。

「……………ねえ」

「……はい」

沈黙の後、彼女は鈴や風鈴よりも透き通った、風情さえ感じる声を俺にかけた。

ただどうしても、そこには怒気や羞恥が見られてならない。

恥じる彼女もやはり可愛らしかったが、いやいや、命の心配をしなくてはならない。怒りの彼女はとても恐ろしかった。

「どうして、下着ってこんなにもガードが薄いのかしら。見られなければ、スカートじゃなくてズボンを穿かなければならないの？」

「……そ、ソナコトオレニキカレマシテモ」

裏声が出てしまった。

カタカナな発音である。

ところで、この世界にはスパッツというものがないのだろうか。あの最終防壁、スパッツがこの世界にはないのだろうか。宵原が凄く喜びそうである。

言っておくが、俺の変態レベルなど知れたもので、真の変態は宵

原であることをここに主張しておく。俺の変態力がスライム程度のものなら、彼の変体力は大魔王ゾーマ様に匹敵するぐらいの差があることを、しっかりと留意していただきたい。

俺は紳士である。

……………俺は、パンツの描写をおよそ千二百文字くらいでまとめるほど、良心的且つ紳士的な男だ。

宵原にやらせると凄いんだぜ？

パンチラ一つで埋まった日記帳を、俺は見たことがある。

「見たよね？」

「見ました」

「……素直なら良いって、思ってる？」

「……………いえ」

「じゃあ、しかるべく制裁は受けるつもりなんだよね？」

「え」

じゃあ？

じゃあ、しかるべく制裁を受けようと思っている　と、思われているんですか、俺は？

彼女はゴソゴソと本を懷にしまって、代わりに杖を取り出した杖？

なぜに、杖？

「あ」

間抜けな声を出すも、もう遅い。

「全てを切り裂く風の刃よ、契約の元に顕現せよ、ウィンスフレード鎌鼬！」

おおお、なんか呪文っぽいものが唱えなれた！　しかもなんかめ

「つちや痛そうな名前！」

思わず目を閉じる。最後に見えた、振りかざされた杖、それに灯っていた小さな光が、きっと魔力か何かなのだろう。

しかし、全てを切り裂くのか。凄いな。もしかして、石とか鉄とかも簡単に切れるのかな？ まあ、風の勢いや水の勢いって、とても強い威力らしいし、きっと俺の体なんてみじん切りにできるんだろうな。って。

待てど暮らせど（実際には五秒も経っていないけど）、俺の体が傷つく様子はまったくなく。痛みも感じないし。目を開いて見た。

「ッ！」

眼前の光景におののく。
ウィンドブレード

鎌鼬なる呪文の対象は、どうやら俺ではなく、彼女になってしまったらしい。

見えない刃。風が、彼女の服を、皮膚を切り裂いていく！ ワンピースがどんどんボロボロになっていって、先ほどと同じ純白をしたブラジャーが見えたりしていたが、紳士たる俺にとってはどうでもいい！

「どうすれば止まる！？」

「……わ、私の魔力が尽きるまで、止まらないっ！間違えたから！」

間違えたからって、何を？

そんなことを問いただしている暇はない！

すでに足と腕に傷ができて、血が流れ始めてるくらいなんだよ！

畜生、どうすれば止まる？ ウインドって言うからには、やっぱり風なんだろうが 風か。風を抑えるには……………風除けを、作る？

それだ！

俺は紳士だ、俺は紳士だ、俺は紳士だ！

「だけど、俺は、今は変態になる！」

「ごめんッ！」

「^?」

俺は思い切り。

目の前の彼女に抱きついた。

彼女のむき出しとなった足や腕を包み込むように、抱きついた。

そしてそのまま押し倒すようにする！

「え、え、え……えええええええつ！？」

風に切り裂かれながらも絶叫する彼女。文字通り耳を切りそうな風音にも負けないくらい大きな声が、彼女には出せる。その余裕がある。

彼女の風を、俺が引き受けているから。

風除けを作る
すなわち、風が入る隙間もないくらい、彼女の
体を覆えば良い。

当然、彼女全体を覆えるわけじゃないが、何もしいよりマシだろっ。

「あ、ちよ……どこを！ どこをさわ……って、い、い、いるのよ……」

「さあ知らないぜッ！ なにせ俺は……変態だからな！」

かつてここまで、自分が変態であることを格好よく認めた男がいただろうか。少なくとも、あの宵原だって、ここまで変態的に格好つけたことはないだろう！

ふははは、体のあらゆるところがムニムニで気持ちいいぜえ！

しかし 彼女の体を存分に味わっているにも関わらず、この風、空気読まずに痛い。凄いいリアルな痛みだ。カッターで切り裂かれるような、鋭利な痛みを俺を襲う……が！

ふははは、パーカーとジーパンってのは、ワンピースよりは布地が硬いんだよ！

……… もちろん、痛いものは痛いけど。手とか顔とかは思い切り引き裂かれているけど。

そのまま、何分経ったのだろうか。

風が、前触れもなくぴたりと止んで、俺は彼女を解放した と、同時に、良い笑顔を浮かべた宵原が歩み寄ってくる。

「元気そうだね、椎橋ちゃん。そして、そちらのお嬢さんも」

畜生、コイツ、絶対タイミングを計ってたな！

ズタズタに裂けた少女のワンピースを舐めるようにして見る宵原に制裁パンチ（弱め）をプレゼントし、うずくまって悶える宵原に制裁キック（弱め）をさらにプレゼントする。

完全にノックアウトされた宵原（耐久力はスライム並みだな）を尻目に、俺は寝転がったまま呆然としているワンピースの少女に手を差し出した。

無言で、彼女は俺の手を握る。
引き上げた。

スタツと立つ。

「……あ、ありがとう」

「おう。というかだ、あんな危ない魔法を俺にかけようとしたのか。しかるべき制裁ってか、重すぎるぜ」

「ご、ごめんなさい……で、でも、見たのよね？ やっぱ、見たのよね？」

「ああ、見たよ。たつぷり千二百文字分。ご馳走様でした」
「……………はあ」

男らしく肯定したのに、なんかひどく落ち込まれた。……やっぱ、女性ってのは下着を見られると落ち込むのだろうか。

妹や幼馴染なんか、下着姿で家の中をうろろろしていたけど。全裸でいたこともあったなあ。あはは、懐かしい話だ。

ううん、わからない。

いっそ自分が乙女だったならば！

と。

「……………ふう」

「お、おい？ なんかフラフラじゃねえか？」

「そりゃ、魔力使いきったもの。へ口へ口よ。しばらくは歩くこともできないわ」

歩くこともできないって。

しかし、彼女の腕や足から血は流れている。

仕方がない。

ダメージファッションに変化した俺のズボンのひざから先を引きちぎる。応急処置的にぐるりと撒きつけて、抑えるように言った、その瞬間。

ガツクンと。
崩れ落ちた。

「つて、おい!？」

なんとか地面に叩きつけられる前に、抱きかかえる。あ、危ない。これで頭でも打たれてたらとんでもないことになってたぞ。

目は開いてるから、気絶はしてないようだが　息は上がり、顔が真っ赤だ。これはどう見ても、体調が悪いんだろう。俺の額と彼女の額をくっつけてみる　熱はなさそうだが。しかし、顔の熱さとか色がハンパないことになってるぞ。

同じくダメージバージョンになったパーカーのチャックを開けて彼女のダメージワンピースを隠すようにかける。幸いサイズが大きいので、それは彼女のパンツまでしっかり覆っていた。

ちなみに、俺は下にシャツを着ていたので問題なし。

本当、仕方ないな。

彼女を背負うように持ち替えて、転がっている杖と箒を宵原に拾わせる(というより、率先して興味を示して拾っていた)。

パンツのせいで、とんだ迷惑だ。

町か村が近くにないか、後ろの彼女に尋ねる。

当初の目的はたったこれだけなのに、何でこんなにも痛い思いをしなければならぬのだろう。

「あるわよ。このまま道に沿っていけば、すぐにノーズノースノの町よ」

「なんて？」

「ノーズノースノの町」

「ノーズノースノ？　なんじゃそりゃ」

「町の名前はノーズノースノー！ わかりなさい、それくらい」

そう言われても、カタカナ横文字の町などは基本日本にない。
日本と言え、どうして日本語が通じているのだろうか。今度訊いてみよう。

とにかく今の俺は、後ろでむにゅむにゅと蠢く温かい丸い怪物二体に意識を向けないようにすることに精一杯だから！

ああ、畜生、どうしても意識してしまいがちだぜ！ しかも俺はシャツで、この子のワンピースは破れているから、温かさとか柔らかさがとてもよく伝わってくる。

ごまかすように、早足で歩き出した。

「そういえば キミの名前を聞いてないぜ、お嬢さん。せっかくなので、名乗られる前に言っておくけれど、僕の名前は宵原良人。よっちゃんとも呼んで頂戴」

誰だよ、よっちゃんって。アンタをそんなふうに呼んでいる奴を俺は見たことねーよ。

「よっちゃん、ねえ。覚えておくわ。ちなみに、私の名前はエリス・エルメトラード。エリスって呼ばれることも多いけど、エルメと呼ぶ人もいるわ。で、アンタは？」

それにしても、歩くたびに振動が伝わって、凄い気持ちいい。

……………はっ！

精神集中雑念よ全て消えよ今当たっているのは決して柔らかい胸ではなくてただの杏仁豆腐だうーん杏仁豆腐だって言うんだったらもう食べてしまいたいなこの杏仁豆腐凄い当たって気持ちいいやいやいやいや違うだろそうだ自制心を失ってはダメだ落ち着け落ち着けせっかく身を張って助けたのにまたあんな凄い魔法使われたら

どうするっていつかこの胸がもはや魔法みたいなもんだよなこの弾力凄すぎる女子の胸ってみんなこんなもんなのかなああああああああああもう余計なことを考えるな前だけ見て歩け椎橋佑！

「アンタはって訊いてるでしょう！」

ガクンガクン。

エリスが俺の肩をつかんで激しく揺らした。

うおお、それに合わせて胸が揺れて、当たる当たる。

つか、元気じゃん。

「椎橋佑」

俺の名前。

椎橋佑の名前を告げた。

「そう。……ねえ、ユウ」

俺の耳元で、エリスは妖艶に囁く。なんというか、今までで一番色っぽさを感じるような囁き声だ。

幼げとか、見当違いも甚だしかったのかもしれない。

胸も大きいし、レディーに対して失礼だったか。

「ありがとう」

ふっと、俺の頬に温かい唇が触れた。柔らかくて、弾力のある、俺の知らない材質でできたような唇が。

「どういたしまして」

俺は、火照った顔をエリスに見せないようにして、そう言った。

とりあえず、にやにや笑っていた宵原には制裁キック（強め）をお見舞いして、やっぱり早足で前に進む。

プロローグ（後書き）

どうも、初めまして。私、東雲八波と申します。

完全ファンタジーと一人称小説を書くのは初めてですので、不手際が多々あるかもしれませんが、よろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0396z/>

勝手に飛んで異世界デイズ

2011年12月1日19時46分発行